月にたとえられるのは他者か

―一首の解をめぐって―

関根慶子

一

又の夜も、月のいとあかきに、藤壷の東の戸をおしあけて、さべき人々、物がたりしつつ月をながむるに、梅壷の女御ののぼらせ給ふなるおとなひ、いみじく心にくくいうなるにも、故宮のおはします世ならましかば、かやうにのぼらせ給はましなど、人々いひいづる、げにいとあはれなりかし

天の戸を雲ゐながらもよそに見て昔のあとをこふる月かな

右の歌文は、周知の通り更級日記中の一節で、作者の仕える祐子内親王が御妹禖子内親王と共に、長久三年四月十三日に入内され、藤壷に入られた時、更級作者もお供をしたが、そのある夜の藤壷での記事であり歌である。この歌について、わたくしは拙者「更級日記」（講談社学術文庫）の注で、「月」を、祐子禖子の御母嫄子中宮すなわち「故宮」をたとえたとする説と、作者自身と女房をたとえたとする説とがあることに触れ、私解は前者を採り、玉井幸助氏の説を妥当とした。玉井氏の説を「増訂更級日記新註」によってあげると、

月にたとえられるのは他者か　―一首の解をめぐって―

梅壷の女御は、いみじく心にくく優なる御様子で、今、上の御局へ上ってゆかれる。月はあはれに輝いてそれを照らしてゐる。その様は、何となく、梅壷の女御の幸福を月が傍から眺めてゐるもののやうに見える。しかもその月は故中宮の面影に通ふやうな心地がする。そこで月をば故中宮に見立てて詠んだものである。即ち歌の意は、「同じ雲ゐにありながら、今は天のと（陛下のあたり近き處）をよそに見て、昔の栄えを恋しく思う月（故中宮のおもかげ）よ」といふのである。勿論、作者自身が故中宮御在世の時を恋ふるのであるが、その心を月にかけ、月を故中宮になぞらへて、間接に我が情をのべたのである。「雲ゐ」「天のと」は、ともに天のことで、雲ゐは又内裏にも用ひられる。ここでは「雲ゐ」を天と内裏とにかけ用ひ、「天のと」を「陛下の御身近きあたり」の意に用ひてゐる。修辞上では、「雲ゐ」「天のと」「月」は互に縁語として用ひたものである。とある。その後、多くの注は「月」を作者自身をたとえた（又は、かけた）とする。その中の管見に入ったもののうち新刊の一例を挙げると、「更級日記　翻刻・校注・影印」（橋本不美男・杉谷寿郎・

小久保崇明）の注には、

作者の歌。「あまのと」は、天空。天皇の御座所あるいは清涼殿へ通ずる戸口をなぞらえる。「雲ゐ」は、空の意に宮中の意をかける。「むかしのあと」は故宮の御事をさす。「月」は、月に作者自身をかけたもの。「あまのと」「雲ゐ」は「月」の縁結。

とある。その後の新刊「更級日記」（新潮日本古典集成、秋山處校注）もほぼ同様で「（上略）「月」に作者ら女房たちをなぞらえている」とする。この「月」に、故宮か作者ら自身かどちらを託するかは、この歌の入集した新勅撰集の詞書及び栄花物語のこの場面の叙述を参照してみても、決定攤にはならないと思われるが、念のため挙げておこう。

御朱雀院の御時、祐子内親王藤壷に変はらず住み侍りけるに、月くまなき夜、女房昔思ひ出て眺め侍りける程、梅壷の女御のまうのぼり侍りけるおとなひをよそに聞き侍りて（新勅撰集・雑一、「天の戸を」の詞書）

内わたりいと今めかしくをかし。殿の宮も入らせ給へり。昔おぼえて女房など物あはれなり。梅壷の女御などの上らせ給ふを見るにも、思ひ出づること多かり（栄花物語・くれまつ星。歌はなし）

新勅撰の詞書は殆ど更級日記の文に添って書かれ、終の方が少し簡略になっているだけであるから、おそらく更級に拠ったものであろう。栄花物語では、月のことは描かれず、特定の一夜の叙述ではないが、殿の宮の女房らが故中宮をしのび「梅壷の女御などの上らせ給ふを見る」などと続く具合から、やはり更級に取材したのかもしれない。しかし何れも「天の戸を」の歌の「月」の問題を解決する料とはならないことを指摘しておこう。

さて右の歌に着目すると、「雲ゐながらも」は月が空にあるから言うのであって、宮中をも「雲ゐ」というから、先の二書の注にも「空の意に宮中の意をかける」とある通りである。ならば作者は宮中にあるのであるから月を作者とすることは意味をなさなくなるのではないか。「雲ゐながらもよそに見て」いるのは月であって、故中宮が「むかし」宮中にあり、今空にあるので、同じ「雲ゐ」ながらも、と言ったとすると、この歌の文脈もそのまま明快に通るように、私見では思われる。すなわち、むかし宮中にあり今は空にあって、同じ雲ゐにありながらも天皇の御座のあたりを、今はよそに見て、昔の自分の栄えのあとを恋しく思う月（故中宮）だこと、の意となろう。玉井氏の解は「雲ゐながらも」を特に説いてはいないが、私解は殆ど一致する。勿論、「昔のあとを恋ふる」情は作者ら女房も同じであるのを託しており、玉井氏も「勿論、作者自身が故中宮御在世の時を恋ふるのであるが、その心を月にかけ月を故中宮になぞらへて、間接に我が情をのべた」と言われる通りで、この間接さが美しいのであり、新勅撰もそこを汲んでいるのではあるまいか。

二

次に、当時の和歌で月にたとえられているのは、殆ど対者か第三者であり、自分自身を月になぞらえた例歌は殆どないのが実状であ

る。この事は拙著にも一言ふれておいたが、例証を挙げることは文庫本の性質上さけておいたので、ここに補って検証しておこう。

更級日記作者の時代を去ること遠からぬ後拾遺集までの四勅撰集から拾ってみる。[注1]

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる　　きの貫之

(1) かつみれどうとくもあるかな月かげのいたらぬ里もあらじと思へば　　(古今・雑上)

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、宿りに帰りて、夜ひと夜さけを飲み物語りをしけるに、十一日の月もかくれなんとしける折に、みこ酔ひて、うちへ入りなんとしければよみ侍りける　　なりひらの朝臣

(2) あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげて入れずもあらなむ　　(古今・雑上)

田村のみかどの御時に、斎院に侍りけるあきらけい子のみこを母あやまちありといひて、斎院をかへられんとしけるを、そのことやみにければよめる　　あま敬信

(3) おほぞらを照り行く月し清ければ雲かくせども光けなくに　　(古今・雑上)

三条右大臣、少将に侍りける時、忍びに通ふ所侍りけるを、上のをのこども五六人ばかり、五月のなが雨すこしやみて月おぼろなりけるに、酒たうべんとて、おし入りて侍りけるを少将はかれがたにて侍らざりければ、たちやすらひてあるじ出せなどたはぶれ侍りければ　　女あるじの

(4) さみだれにながめくらせる月なればさやにも見えず雲がくれつつ　　(後撰・夏)

題しらず　　人麿

(5) みか月のさやかに見えず雲がくれ見まくぞほしきうたてこのごろ　　(拾遺・恋三)

題しらず　　よみ人しらず

(6) あふことはかたわれ月の雲がくれおぼろけにやは人の恋しき　　(拾遺・恋三)

題しらず　　人麿

(7) 秋の夜の月かも君は雲がくれしばしも見ねばこゝら恋しき　　(拾遺・恋三)

題しらず　　人麿

(8) 久方のあまてる月もかくれゆく何によそへて君をしのばん　　(拾遺・恋三)

菩提樹院に、後一条院の御影をかきたるを見て、見なれ申しける事など思ひ出てよみ侍りける　　出羽弁

(9) いかにしてうつしとめけん雲ゐにてあかずかくれし月のひかりを　　(後拾遺・哀傷)

月あかき夜、ながめしける女に、年へて後に遣しける　　源　則成

(10) 年もへぬ長月の夜の月かげのありあけがたの空を恋ひつつ　　(後拾遺・恋一)

物いひ侍りける男の、昼は通ひつつ夜とまらざりければ

よめる　一宮紀伊

(11) わが恋はあまの原なる月なれや暮るればいづるかげをのみ見る

大貳高遠、物いひ侍りける女の家のかたはらに、又忍びて物いふ女の家侍りけり。門の前より忍びて渡り侍りけるを、いかでか聞きけん、女のもとより遣しける　よみ人しらず

(12) すぎてゆく月をも何に恨むべき待つわが身こそあはれなりけれ　(後拾遺・恋三)

あづまに侍りける人につかはしける　民部卿経信

(13) あづま路の旅の空をぞ思ひやるそなたに出づる月をながめて　(後拾遺・恋三)

返し　康資王母

(14) 思ひやれしらぬ雲路も入かたの月よりほかのながめやはする　(後拾遺・恋三)

後朱雀院御時、月のあかかりける夜うへにのぼらせ給ひて、いかなる事か申させ給ひけん　陽明門院

(15) いまはただ雲ゐの月をながめつつめぐりあふべきほどもしられず　(後拾遺・雑一)

後朱雀院の御時、としごろ夜居つかうまつりけるに、後冷泉院位につかせ給ひて、又夜居にまゐりてのち、上東門院に奉り侍りける　天台座主明快

(16) 雲のうへに光かくれし夕べよりいく夜といふに月を見つらん　(後拾遺・雑三)

世の中さわがしき頃、久しう音せぬ人のもとにつかはしける　伊勢大輔

(17) なき数に思ひなしてやとはざらんまだありあけの月まつものを　(後拾遺・雑三)

小弁、斎院にまゐり侍りて、ほのかに見奉りたるよし言ひおこせて侍りける返事に　六條斎院宣旨

(18) ゆふしでやしげき木のまをもる月のおぼろけならで見えしかげかは　(後拾遺・雑五)

(三月十五日の夜中ばかりに伊勢大輔がもとにつかはしける　慶範法師

いかなればこよひの月のさよ中に照らしもはてで入りしなるらん)

返し　伊勢大輔

(19) 世を照らす月かくれにしさ夜中はあはれやみにや皆まどひけん　(後拾遺・雑六釈教)

つくしに下りて侍りけるに、のぼらんとて、家あるじなる人のもとに遣しける　湛円法師

(20) 山のはに月かげ見えば思ひ出でよ秋風ふかばわれも忘れじ

古今集から後拾遺集までの勅撰集を対象として、その中から「月」を詠み込んだ歌を採り、又そのうちで「月」に何かをたとえよそえている歌を拾っていくと右の二十例が検出された。これらを一首ずつ検討してみると、(1)から(19)までの十九例は対者、他者に寄せたものであり、(20)の一首も後述するように、作者自身をよ

そえたと言えば、特殊な説明を要するものである。以下各検討の結果を概略述べておこう。

（1）では、「月おもしろしとて」躬恒が訪れたので貫之が躬恒を月によそえて、あなたもわたしの所だけでなく、方々へ訪れるだろうから、やっぱり疎い間柄なのだ、というように皮肉ったのである。（2）では、「うちへ入りなんとし」た惟喬のみこを月にたとえて「まだきも月のかくるるか」と言っていることは明白で、業平自身が月ではない。（3）では、斎院あきらけいこのみこ（慧子内親王）を月にたとえて、斎院をやめられずにすんだことを「光けなくに」と詠んだものであろう。母を月にたとえたとする解もないではないが、採らないでよかろう。（4）では、『八代集抄』[注2]に「我待ちて詠めくらす月と少将を比してよめり」とあるように、少将を月にたとえて「さやにも見えず雲がくれつつ」とそこにいないのを詠んだのである。（5）では、恋人を「みか月」によそえて詠み、（6）では、恋人を「かたわれ月」に、「あふことは」「かた（難）し」とかけて「かたわれ月（片割月）」に恋人をよそえる。（7）では「月かも君は」とあるので、恋人を月にたとえているのは自明で、秋夜の月はすばらしく、雲にかくれて少しでも見えないと、とても恋しいのと同じく、恋人に「しばし」ながら逢わないので、ひどく恋しいのを歌う。

（8）では『八代集抄』に「月を思ふ人になぞらへて見るに、夜もふけて月も入て……」とあるように、出ていた月を恋人によそえていたことはいうまでもない。（9）では、後一條院を月にたとえて、崩御せられたので「あかずかくれし月」と言うのである。

（10）では、単にその当時を恋しく思うとも解せるが、その夜の女を「月かげ」に寄せて思うとも解し得るので、挙げておいた。少なくとも、作者自身が「月かげ」でないことは明かであろう。（11）では、「恋」即恋人を月にたとえていることは明瞭で、「暮るればいづる」という所に「夜とまらざりければ」の意を示したもので、日が暮れると、とまらず出て行く恋人を、暮れると出る月にかけて言ったものと思われる。『八代集抄』で「暮るれば只影のみ見て相語ふ事もなきを、月にたとえてよめるなるべし」とあるのは、「暮るれば出づる」の「出づる」のねらいを説き得ていないと思われるが、月にたとえたと解することは同然である。

（12）では、門の前を忍んで通り過ぎた高遠を、「すぎてゆく月」とたとえていることに疑問はあるまい。（13）・（14）の贈答は、相手が東国にある人だから、東の空に出る月をながめて思いやり、西にある人への返歌だから、西に入る月をのみながめやる。と答えたもので、必ずしも相手を月になぞらえたとは言えないかも知れぬが、よそえていると解すれば、作者自身をではなく、相手をであることは明白である。ちなみに、月は感傷を誘うものであり、自分も相手も共通に眺めるものであるから、月を眺めながら相手を思うという歌は、次のような場合も、必ずしも月に相手をなぞらえていると言うべきか否か断言し難いが、月に恋しさをそそられることは同時に、そこに相手が重ねられているとも言えるのではあるまいか。

月あかかりける夜、女のもとにつかはしける　　源さねあきら

恋しさは同じ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

月にたとえられるのは他者か　―一首の解をめぐって―

さやかにも見るべき月を我はただ涙に曇る折ぞおほかる

の如きで、拾遺恋三に見られる贈答である。

（15）では、『八代集抄』に「いかなる勅言ゆゑ、かくめぐり逢ふべきほどもしられず、とよませ給ふは知りがたけれど」とあるように、どういう内容かはわからないが、天皇のお言葉でお逢いできなくなり、陽明門院は、ただ天の月をながめつつ天皇をおしのびするという心境を詠んでいて、雲ゐの月に天皇が託されていよう。（16）では、『八代集抄』に「後朱雀院ののち後冷泉院の御時侍る心也、夕日入りて月を見る心なるべし」と明快な注がある通り、月に後冷泉院が託されているのである。（17）では、「久しう音せぬ人」に、まだ生きていて、あなたの音づれを待つと、「ありあけの月」の「あり」に「まだあり」をかけて言ったのであるから、「久しう音せぬ人」を月に託して言ったものである。（18）では、茂った木の間をもる月がほのかなさまを斎院に託して、よくもほのかに見奉ったことだ、と相手に答えたわけで、月に斎院をたとえたのである。（19）は括弧内に記した歌の返歌であり、慶範法師が、二月十五日仏入滅の日に、涅槃経序品にちなんで詠んだのを受けており、『八代集抄』に「此歌も仏を月に比して入滅を歎く衆生の心を闇とよめり」とある通りで、「月」は仏をたとえていること自明と言えよう。

以上十九例は、すべて他者を月にたとえなぞらえたのであって、作者自身を月になぞらえた歌は検証されず、月と作者とを列記してまとめると次の通りで、月の欄に作者名が同じく挙がる例は見られないのである。

掲出歌	月	作者
（1）	躬恒	貫之
（2）	惟喬親王	業平
（3）	斎院懽子	あま敬信
（4）	少将	あるじの女
（5）	恋人	人まろ
（6）	恋人	よみ人しらず
（7）	恋人	人まろ
（8）	恋人	人まろ
（9）	後一条院	出羽弁
（10）	ながめしける女	源則成
（11）	男	一宮紀伊
（12）	大貳高遠	よみ人しらず
（13）	康資王母	経信
（14）	経信	康資王母
（15）	後朱雀院	陽明門院
（16）	後冷泉院	天台座主明快
（17）	久しう音せぬ人	伊勢大輔
（18）	斎院	六條斎院宣旨
（19）	仏	伊勢大輔

ところで、（20）一例のみは、山のはの月かげに自分を思い出してくれというのであるが、『八代集抄』に「山のはの月は、東方都のかたなれば、我を思ひ出でよと也。秋風は西より吹きてつくしの

方なれば、我も忘れじと也」とあるように、月は東、秋風は西を意味するという前提で、「秋風」（西―相手）に対して「月かげ」（東―自分）を置いているので、単に自分を月かげになぞらえた場合とは違う特例と見られよう。

なお、一首の中に、自分を相手と対せしめて、東西の関係で自分を月に託したという意味で、相似た一例を金葉集『別離』の中に見ることができた。

経平卿つくしへまかりけるに、ぐしてまかりける時、公実のもとへつかはしける　　中納言通俊

さしのぼる朝日に君を思ひ出でんかたぶく月に我を忘るな

というのであるが、これにも『八代集抄』は「筑紫より都は東にあたれば、朝日に君を思ひ出でん、傾く月には、西国の我を忘れず思ひ出でよと也」と注するように、東と西で日と月が対されて、西の自分に月があてられたのであり、しかも「さしのぼる朝日」に対して「かたぶく月」という所に、相手を賞で自分を謙遜する語調がこめられているのである。これらはある条件のもとに、自分の側に「月」をもって来た特例と言ってよかろう。月は美しく、天にあって神秘的な存在でもあり、仏語の「眞如」とも結びついて「眞如の月」[注3]などとも用いられるようになるほど崇高なイメージをもつものであるから、歌作者が相手になぞらえることはあっても、無条件に直接自分によそえることは、自然起らなかったのではあるまいか。

以上、後拾遺集までの四勅撰集から、何物かを月にたとえた歌を網羅的に拾って考えてみたのであるが、解釈の仕方などで取捨に相違が生じ、落ちたものも逆に落とすべきものも生じているかも知れない。しかし何れにしても大勢は知られたと言えよう。そしてこれらによれば、月を作者自身にたとえた例は皆無に近いと見られるのである。[注4]

かくて翻って、冒頭に掲げた更級日記の「天の戸を」の歌での「月」を、作者でなく中宮と解する説への補強ともなれば幸いである。

注1、以下勅撰各集の引用は、『八代集全註』（有精堂）の本文に拠ったが、文字表記及び句読点は適宜改めたものもある。

2、本稿の問題とする点に関しては諸注を掲出する必要のないことを確認し、一貫して『八代集抄』の解を必要に応じて挙げることにした。

3、「眞如の月」なる用例は曽我物語あたりから見られるが、何時頃から用いられ始めたかは、いま明瞭にし難い。

4、私家集等からの検証は掲げなかったが、大体の見通しは同様である。